

# 行動による人が持っている情報ネットワークの 可能性の発見と再構築、情報空間 によるモデル

苔米地博士の論文

初速度のドーパミンの量からの行動の補助から、終わりの精神のドーパミンの量の調節、相加相乗平均から、始まりと終わりの精神のドーパミンの調節による人の行動の領域による予知

$$x \log x = \left( v_0 + \frac{1}{at_n} \right) V, V_x = e^f + \frac{1}{e^f}$$

経路積分によるエントロピー不変量からこのドーパミンの量から人の行動傾向が決まる。基礎代謝の持続できる距離と精神の介入と補助、言語の発生と抑制による経路パターンの組み合わせを再構築する。

$$\|dx^2\| = \int \exp\left(\frac{1}{\sqrt{2\tau q}}L(x)\right) + O(N^{-1})d\tau$$

$$p = \frac{v}{2m}, \hbar = \frac{p}{2mv}, \lambda = h\nu$$

これらの式から、言語の神経ネットワークによる単体クラスの組み合わせパターンとその対象の人の領域による人が持っている情報空間の傾向の可能性のポテンシャルエネルギーの予知を人工知能の正規表現で抽出する。

$$\frac{d}{d\gamma}\Gamma = \Gamma^{\gamma'} = e^{-f}$$

$$C = \int \left( \int \frac{1}{x^s} dx + \log x \right)$$

オイラーの定数は、ゼータ関数とゼータ関数自体のエントロピーを体積積分した結果でもある。このオイラーの定数は、ガンマ関数の大域的微分方程式からも導出できる。このガンマ関数は大脳基底核のエントロピー不変量の強度も表している。このガンマ関数の大域的微分多様体による、ブレインインターフェースでの人体のデータ計測もこの Jones 多項式とラプラス方程式からの3次元多様体のエントロピー不変式からも、言語とイメージの大脳基底核からのデータ抽出も可能と言える。